

[駒沢女子短期大学 研究紀要 第37号 P.9～15 2004]

一公立小学校における英語活動の教材分析： 公立 N 小学校「英語活動」に関わる 5 年生対象の意識調査

金 澤 延 美

An Analysis of the Teaching Materials for the English Activities in a Public Elementary School —Based on the Results of Questionnaires on English Activities Provided for the 5th Graders of the N Elementary School

Nobumi KANAZAWA

1. 研究の背景

平成14年度に新学習指導要領が施行され、平成14年4月より公立小学校3年生から「総合の学習の時間」が設置された。これにより、公立小学校においても、3年生から「国際理解教育」の一環として外国語が導入され、英語活動を取り入れることができるようになった。

文部科学省の発表によると、平成14年度に「総合の学習の時間」に英語活動を取り入れた小学校は、69.4%である。「平成13年度自治体調査」では、6年生の「英語活動」の実態は、全国の公立小学校22,847校中、12,806校で行われており、これは全体の56.1%であったことから、小学校における英語活動は今後も急激に増加していくと考えられる。しかし、平成14年度の「英語活動」の実施状況については、月に1回程度が一番多く、ALTが来校する日に「英語活動」を入れている小学校が多かったという報告がなされている。

世界的に見て、英語が小学校において教科として導入されている国の数が増加の一途をたどっており、日本も近い将来、教科導入せざるを得ない状況にあり、この方向に向けての動きが見られる。しかし、この実現のためには、目標の明確化、教員の研修体制を含めた指導者の育成、教材の開発・研究など、課題が山積している。特に、教材の問題は、英語の専科が存在しない小学校現場においては、「英語活動」の教材についても、暗中模索の状態であるといっても過言ではない。

2. 研究調査の学校現場と課題設定

小学校における英語活動への取り組みは、平成7年度に始まった研究開発校、大阪の真田山小学校・味原小学校での取り組みを皮切りに、平成14年度の新指導要領の改定を踏まえ、実施年までに以下の各方面の実践を通して推進されてきた。

- ① 文部省の研究開発・指定校での実践
- ② 小学校における国際理解教育の発展としての実践
- ③ 市町村の取り組み

板橋区内のN小学校においても、平成13年10月より文部科学省および板橋区教育委員会の事業「板橋区子ども外国語学習推進事業」の一環として、「英語学習教室」を実施し、平成14年度からは、英語活動を「総合的な学習の時間」に位置づけ、現在も継続中である。活動の目標は、楽しみながら英語や外国人および外国の文化に触れ、言語に対する感性を養うとしている。初年度は、学習対象を5年生(2クラス)のみとし、次年度より5、6年生となった。指導者は、同地域の中学校のネイティブ・スピーカーであるALT2名と担任とで、チーム・ティーチング指導を週2日間行う。筆者は実施年より年間6～7回の授業参観を通して、この英語活動の助言・指導を行っている。

この授業参観を通して、英語活動担当者へは以下の問題点を指摘してきた。

- ① 担任とALTがよく打ち合わせ、互いに活動内容、活動方法を事前に確認できる体制を整え

る

- ② 担任が通訳をしたり、内容を黒板に日本語で板書するなどしない
- ③ 文法項目を念頭に置いた構文中心の授業を行わない

しかしこれまで、ALT 自身が日本語に慣れてくると日本語で説明を加えたり、担任は「分からない」という生徒にすぐさま日本語で内容説明をしてしまうことが多く、英語だけの授業がうまく行われない状況があった。また、学校現場の忙しさ、また英語が不得手な担任の場合は、ALT に一任という状態であり、事前の打ち合わせも十分に行われていなかった。各クラスの児童数が30余名という状況の中、次第に児童の活動よりも指導者主体の授業になっていた。

平成15年3月にALT 1名の帰国により、空きとなった授業時間を筆者が担当し、担任とペアを組んだ。その際、担任にアンケート調査を依頼し、以下の点の解明を試みた。

- ① 英語だけの授業が可能か
- ② 児童主体の英語活動は可能か
- ③ 担任の十分な参加を求め、協力を図るための事前の打ち合わせをどのようにするか

本稿では、上記の①②③の点について、アンケート結果を分析し報告をする。

3. アンケートの実施と考察

アンケート調査日：2003年3月4日

対象者：N 小学校 5年1組 (37名)

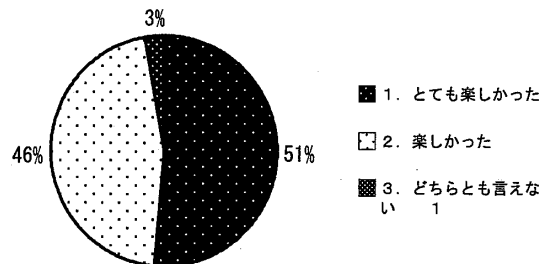
測定具：全9項目から成る5段階形式のアンケート

3.1 当日行った「英語活動の時間」の児童の感想

当日の45分間の英語活動は、a) あいさつの会話 b) あいさつの歌 c) ペア・ワークを取り入れたあいさつのアクティビティ d) 紙袋の中身をあてる“Guessing Game” e) ビンゴ・ゲーム f) 終わりのあいさつの会話、という組み立てで行った。この授業の感想を、「とても楽しかった」から「全然楽しくなかった」までの5段階尺度形式を用いて調査した。その結果、97%の生徒が「とても楽しかった」「楽しかった」と回答した。特に「とても楽しかった」との回答は46%と、半数近い。1名だけが「ど

ちらとも言えない」と回答したが、否定的な回答はまったくなく、当日の「英語の時間」の活動が、大変好意的に受け取られたことが分かる。

Q1：本日の英語の授業について



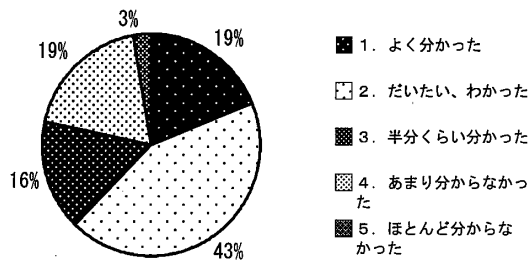
3.2 英語だけで授業を行ったことについて

本授業は、アクティビティなどの説明も含め、45分間の授業中、いっさい日本語を使わなかった。事前の打ち合わせで、担任は、通訳はもちろんのこと、日本語での補足説明および板書をしないことにした。また、子どもたちへのゲームなどの説明も含めてすべて英語で授業を進めた。そのため、筆者と担任とがデモンストレーションで会話を行う必要があり、担任には授業の1週間前に、デモンストレーション用の会話部分を盛り込んだ細部にわたる授業案を送り、電話で確認し合った。

回答の選択肢と形式は、「よくわかった」から「ほとんどわからなかった」までの5段階尺度形式を用いた。その結果、「よく分かった (19%)」「だいたい、わかった (43%)」という回答が60%以上あり、また半分くらい分かったが16%であった。これに対して、否定的な回答に関しては、「あまり分からなかった」が19%、「ほとんどわからなかった」が3% (1人) という結果であった。

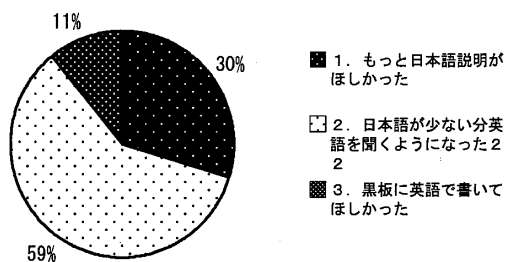
従来、ネイティブ・スピーカーの指導の際は担任が通訳するなどの補助を行ったが、本授業ではこれを行わなかった。それにもかかわらず、4人に3人は半分以上内容把握、理解ができたという結果が出た。担任の補助については、3つから選択させたが、「英語をよく聞くようになった」という回答が約60%あり、「もっと日本語で説明してほしいかった」(30%)の2倍という結果が出た。板書の要望は11% (3名) であった。男女比の調査では、担任に日本

Q2：英語だけでの授業について



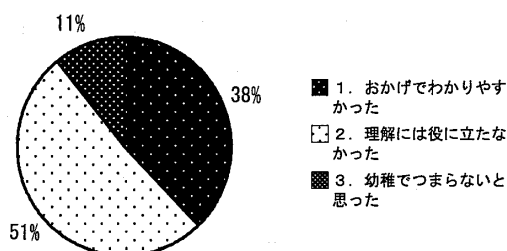
語の補足説明をしてほしいという要望は、男子8名、女子2名と、男子のほうが多かった。一方、日本語説明のない分英語をよく聞くようになったという回答は、女子14名、男子8名と女子の方が多いことがわかった。

Q4：担任の日本語補助について



英語だけでの説明部分に関しては、授業者と担任、あるいは授業者が指人形を使用してのデモンストレーションで補った。この指人形使用に関して、3つの選択肢から選ばせたが、「理解には役に立たなかった」という回答が51%、また「幼稚でつまらない」が11%という結果が出た。「わかりやすかった」

Q3：指人形使用について



という回答は、38%と半数以下であった。

3.3 教材について

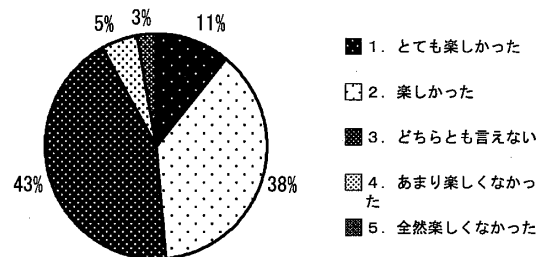
回答の選択肢と形式は、「とても楽しかった」から「全然楽しくなかった」までの5段階尺度形式を用い、本授業で使用した教材（歌、アクティビティ、ゲーム）についての調査分析を行った。

3.3.1 英語の歌について

持参したカセットの音量が足りなかったことと、やむを得ない事情で最初の5分間は担任不在で授業を行った。そのため、歌についての導入、発展が十分にできなかった。準備の不備にもかかわらず、49%の生徒が「楽しかった」と答え、「楽しくなかった」という回答は8%とであった。

なお、「楽しかった」とする回答は、女子11名に対し、男子6名で、女子のほうが多かった。

Q5：英語の歌について



3.3.2 アクティビティ・ゲームについて

「挨拶のアクティビティ」には、ペア・ワークを取り入れた。子どもたちは、クラス内を自由に歩き回りながら実際に互いにあいさつをし、互いにシールをつけ合うというアクティビティを行った。

まず、T（授業者）が、赤、黄色、青のシールを出し、英語で説明し、TがHRT（担任）に3色のシールのうち1色を選ぶように指示し、以下のデモンストレーションを行った。

T: Please take one of the stickers. Which color do you like?

HRT: Yellow stickers, please.

T: Sure, here you are.

HRT: Thank you.

T : You're welcome.

この説明後、子どもたちはそれぞれ一列になり、T と HRT とが手分けして、上記の会話を子どもたち一人一人と行い、それぞれ好きな色のシールを3枚ずつ渡した。

次に、T と HRT が向き合い、以下のあいさつのデモンストレーションを行った。

T : Hello. How are you, Mr. Suzuki?

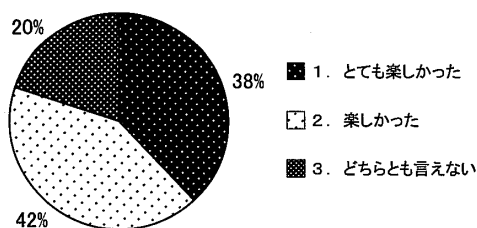
HRT : I'm fine, thank you. And you?

T : I'm fine, too, thank you.

あいさつ後、互いに自分のシールを一枚はがし、相手のえり（手の甲でも、どこでもよい）につけ、Thank you. Bye. と言い、3回ペアをかえて行い、終わった順に席に着いてよいとの説明をした。T と HRT も参加し、全員がクラス内を歩き回り、ペアになり、上記の会話をを行った。

このアクティビティに関しては、「とても楽しかった」という回答が38%と高く、「楽しかった」を含め、肯定的な回答が約80%で、否定的な回答は見られなかった。

Q6:挨拶のアクティビティについて



「あてっこゲーム」は、紙袋に野菜、あるいは果物をつつ入れ、中身をあてるゲームである。T が茶色の紙袋を取り出し、がさがさ振り、T と HRT が以下のようなデモンストレーションを行った。

HRT : Is it a fruit?

T : Yes, it is.

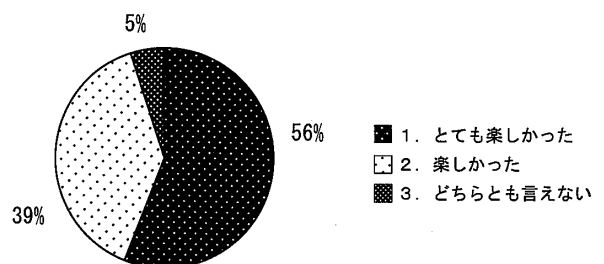
HRT : Is it a banana? / Is it hard? / Is it green?

次に、子どもたちと正解が出るまで、質疑応答を繰り返した。正解がすぐに出ない時に、HRT に、

“Let me see.” と言ってもらい、中身を見せた。この導入以後、“Let me see.” と言った子どもには中身を見せ、今度はその子にほかの子どもたちが上記のような質問をするように持っていく。

アンケートの結果、「とても楽しかった」という回答が56%と一番高く、「楽しかった」という回答と合わせ、肯定的な回答が95%であった。否定的な回答は見られなかった。

Q7 : あてっこゲームについて



3.3.3 「ビンゴ」について

上記の「あてっこゲーム」の最後の袋にビンゴゲームの箱を入れておいた。これを取り出し、フラッシュ・カードとチャートで形と色 (circle, triangle, oval, square, rectangle, diamond / yellow, blue, red, pink, green, black, white, purple) の確認をする。ビンゴ・ゲームの説明を英語で行ってから、カードを黒板にはり、T と HRT が以下のデモンストレーションを行った。

T : Do you have a blue circle?

HRT : No, I don't.

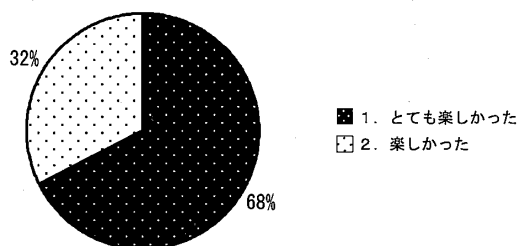
T : Do you have a yellow oval?

HRT : Yes, I do.

子どもたちにそれぞれビンゴ・カードとチップを配り、ゲームを開始した。HRT は、全員が、Yes, I do. / No, I don't. と答えながらゲームを行うよう目を配った。

アンケート結果から、「とても楽しかった」という回答が68%と一番高く、「楽しかった」という回答と合わせ、肯定的な回答が100%であり、全員がこのゲームを楽しんだということが分かった。

Q8：ビンゴについて



3.4 本授業に対する子どもの反応

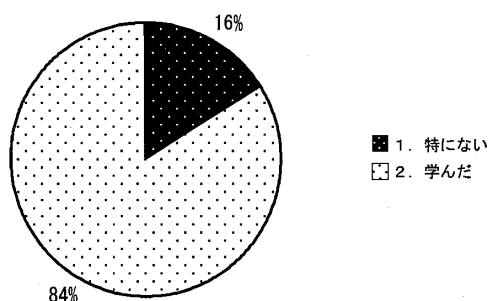
国際理解教育の視点を取り入れて行った「英語活動の時間」の授業内容の中で新しい単語、表現は、「形のビンゴゲーム」の際導入した6つの形に関する単語のうち“triangle, rectangular, oval, square, diamond”、“Let me (see/touch).” だけである。

「今日の英語の授業でどんなことを学びましたか?」という質問に対し、「特にない」と「学んだ」の2選択肢の中から回答し、「学んだ」という回答者には、学んだ事は何かを記述回答してもらった。

「学んだ」という回答が84%、「特に学ばなかった」という回答が16%（3名）という結果だった。

記述回答には、a) (いろいろな) 英語 b) 形の英語の言い方 c) あいさつの英語 d) 物を当てるときの質問や答えなどの英語 e) 数の数え方 f) 英語の楽しさ g) 正しい発音、挨拶の時の発音、発音が大事だっていうこと h) 目を見てあいさつすること、などが書かれていた。

Q9：授業で何を学んだか



4. まとめ：研究目標に関するアンケート調査結果の考察

4.1 英語だけでの授業の可能性

英語のみで授業を行うほうが、生徒の集中力を高めることができる。アクティビティなどの説明に関しては、担任と具体的なやり方などをデモンストレーションを行うことで子どもに分かりやすく説明できる。しかし、低学年には有効な指人形の利用価値が低いこともわかった。以上のことから、担任が英語指導者の説明の後にすぐには通訳しないことがよい。

英語だけで行われた授業について、「半分くらい分かった」「よく分からなかった」とやや否定的な回答をした児童の半数は、「(担任による) 日本語の説明が少なかったが、その分英語を聞くようになったと思う」と、記述回答している。また、「あいさつのペア・ワーク」「あてっこゲーム」「ビンゴ」に関しては、「英語説明がよく分からなかった」と回答した子どもたち全員が「大変楽しかった」「楽しかった」と回答している。クラスの子どもたち全員の全活動への参加は、授業中の観察によっても確認できた。すぐに十分な理解ができなくても、周りの子どもたちの活動を見ながら、十分理解して活動に参加できたようである。また、「だいたい理解できた」と回答した子どもたちの記述回答からは、「英語を聞いて、こういうことだな、と思ったことがやっぱりそうだったとき、うれしかった。」等、英語を一生懸命聞こうとする態度や、デモンストレーションなどから推測して、理解のプロセスを踏んでいたことが分かった。

授業で何かを学んだことについては、全員が「英語を学んだ」と回答をしている。このことは、担任による、通訳、日本語の補足説明を最小限度におさえた結果によるものと考えられる。

4.2 児童主体の英語活動の可能性

今回の「英語の活動」は、児童主体の活動を中心とした。教えたい構文を従来のように黒板にALTが書き、担任が日本語で説明あるいは日本語訳を書くのではなく、アクティビティやゲームの中に英語の活動を取り込むようにした。

本授業の中で導入、練習した構文は、「あてっこ

ゲーム」の中では、“Let me touch.”と“Is it a ~?”である。紙袋の中身を当てたいために、子ども達は大きな声で“Let me touch.”と、次々にさけび、触らせると、手をどんどん挙げて、“Is it (a) ball?”など、質問した。このゲームのアンケート結果は、「楽しかった」という回答が95%であった。

「ビンゴ」については、“Do you have ~?” “Yes, I do.” “No, I don’t.”の2構文を導入した。ビンゴに必要な6種類の形の英語を導入のあと、ゲームでは、英語指導者が“Do you have a yellow circle?”と質問し、それが自分のカードに「ある」か「なし」に応じて、“Yes, I do.” “No, I don’t.”と答えさせた。教師の質問に対し、一斉に同じ答えを言うやり方でないため、子どもたちはコミュニケーションを自己表現として楽しむことが出来た。また、一人一人の手元にあるカードが違うため、質問を他人任せではなく、自分自身で聞き取ろうという意欲が感じられた。ゲームを通して、インプット、アウトプットを繰り返すことにより、子どもたちは集中したようである。

構文の導入に関しては、その構文の必要場面の設定が重要である。同時に彼らが十分に口頭練習できるような工夫が必要である。

ペア・ワークでは、国際理解教育の視点から、目線を合わせながら挨拶するなど、外国人との実際の交流を想定してアクティビティを行った。その際、挨拶を終えたあとに互いにシールを交換したことで一層おもしろさが増したようだ。手持ちの3枚がなくなった順に席に座るというルールも進行上のスピード・アップに役立った。ビンゴやあてっこゲームなどが好評だったことから、遊び的な要素、競争原理などの導入を工夫する必要性がある。

4.3 担任の十分な参加、協力を図るための事前の打ち合わせの必要性

今回の授業の成功の要因の1つとして、担任との協力がうまくいったことがあげられる。

担任は、筆者とのデモンストレーション時の会話を含め、事前に授業案を入手し、内容確認をしており、授業中の連携プレイがとれた。連絡方法としては、N小学校には、コンピュータが設置されていたがメールの確認を常時行っていないため、ファッ

クスを利用した。

通常の「英語活動」では、授業内容についてのファックスがALTから英語が得意な担任に事前に入ることになっている。しかし英語で書かれており、また十分な説明が不足している。そのため担任はどのように実際の授業において関わればよいかが、分からない。このことが、担任が授業中、単に通訳(ALTが黒板に書いた単語などをその場で辞書で調べて伝える等を含む)、日本語での説明補助、うるさい子どもたちへの注意などの関わりだけに徹せざるを得ない結果を生んでいる。

ALTに早めの授業内容連絡を要請すると同時に、担任がもっと積極的にALTに働きかけ、指導者の一人として授業に参加していく必要がある。担任は、教えるプロであるだけでなく、クラスの子どもたち一人一人について熟知しているのである。

今回の実践により、ALTと担任が連絡を取り、担任が活動内容、活動方法を事前に確認できる体制を整えることにより、ALTと2人3脚で一層質の高い「英語活動」の時間を作りあげていくことができるということが明らかになったと言える。

諸外国の英語教育および外国語教育への取り組みについては顕著な変化が見られる。大谷(2002)は1977年から2001年における世界45ヶ国の外国語教育の動向について、必修外国語数が増加し、外国語学習開始年齢が早まり、外国語学習の柔軟性が進んでいると報告している。このことから、日本の外国語教育の遅れを否定することはできない。

今回行った上記の調査により、早期英語教育の改善の方策についていくつかの示唆が得られたと考えている。

参考文献

- 1) 伊東弥香・庄司千絵「日本の英語教育におけるTEEの意義と可能性—バイリンガル研究および認知神経科学的見地による一考察—」(MPIリサーチ・プロジェクト・チーム)『日本児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要』第21号 2002
- 2) 大谷泰照「第2部『先進諸国』から見た日本の外国語教育への示唆」竹内・相川ほか(編著)『先進諸国の外国語教育：日本の外国語教育へ

- 3) 東野裕子・高島英幸「英語活動から『小学校英語』教育へー『小学校学習指導要領外国語（英語）科』をシミュレーションするー」『日本英語教育学会（JASTEC）研究紀要』第22号 2003
- 4) 松崎邦守・北条礼子「公立小学校における『英会話活動』に関する意識調査ー公立小学校現職職員に対するアンケート調査をととしてー」『日本児童英語教育学会（JASTEC）研究紀要』第22号 2003
- 5) 文部科学省「小学校英語活動実践の手引」開隆堂 2001
- 6) 文部科学省『英語指導方法等改善の推進に関する懇談会報告』東京：文部科学省，2001

アンケート

2. 今日は、英語だけで説明したり、質問したりしましたが、わかりましたか？

1. よく、わかった 2. だいたい、分かった
3. 半分くらいわかった 4. あまり分からなかった
5. ほとんどわからなかった

3. 指人形のニッキーについて、どう思いましたか？

1. ニッキーのおかげで、わかりやすかった。
2. 理解には役に立たなかった。
3. 幼稚でつまらないと思った。

4. 今日の授業での担任の先生について質問します。

1. 日本語で説明してほしかった。
2. 日本語の説明はなかったが、その分英語を聞くようになったと思う。
3. 黒板に英語を書いて説明してほしかった。

その他（ ）

10. そのほか、今日の英語の授業の感想を何でもいいですから、書いてください。